私の辞書指導方法
――語法学習の伴侶として

中島　洋己

●『ジーニアス英和辞典』との出会い

1989年４月，高校生になったばかりの私が学校から指定されたのは，前年1988年の秋に発行された『フレッシュ ジーニアス英和辞典』だった。白いパッケージにピンクと金のライン。その名の通り新鮮なパッケージに見やすいレイアウト，そしてわかりやすい語法解説。私のお気に入りの辞書となったが，前年に入学した当時の高校２年生は1987年秋に発行された『ジーニアス英和辞典』を使っていた。担当の先生になぜ我々の学年は『ジーニアス』ではなく『フレッシュ』なのか尋ねると，「語数が必要以上に多く使いこなせない生徒が多かったから，今年は語数を絞った『フレッシュ』を指定した。悔しかったら君たちも『フレッシュ』を十分使いこなして『ジーニアス』を愛用できるよう頑張りなさい」と言われた。先輩たちが愛用する『ジーニアス』の黒いパッケージがやけにまぶしく映り，一層英語の勉強に精進した。

●『ジーニアス英和辞典』の特色

多くの方々に語られていることなので今更言うまでもないが，やはり一言でいえば「語法のジーニアス」。語法説明が他のどんな辞書より詳しく説得力がある。近年文法以上に語法に関する設問が多くなる中，次に来る目的語の種類，前置詞，二重目的語の可否，名詞の使い分け，単複の区別などわかりやすい表示や解説が嬉しい。さらに語彙数も必要十分に達しており，固有名詞，専門用語など『ジーニアス英和大辞典』の要素も大いに加わって長文を読む背景知識（スキーマ）の活性化に役立つ。ただひとつ難を言えば改訂スパンが他の英和辞典より長く，第４版が発行されてこの秋で７年が経過する。この７年間で多くの時事英語，情報・ネット関係の英語が新たに加わった。それらを新たに加えた第５版の早期刊行を心から期待している。

●初期の辞書指導

正直に言って，十分な辞書指導・辞書活用が授業中にできているとは言い難い。本校では入学時に推薦辞書を２，３点挙げて必ず紙の辞書を授業に持参するように指導しているが，ほとんどの生徒が電子辞書を購入し授業中に活用している現状にある。確かに電子辞書の方がスピーディーで便利だという意見もあるし，私の指導法は「やり方が20年古い」と言われるかもしれない。しかし，私は紙の辞書を使うことが大切だと考え，以下のように指導している。

まず，今後受験指導をしていくうえでカギとなる単語（例えば動詞ならdiscuss，名詞ならadviceなど）が出てくるたびに紙の辞書を使わせて一読させ，自分が大切だと思うところに生徒各自にマーカーをひかせる。discussなら「他動詞」「～について話し合う」「前置詞aboutは不要」「直後に人が来たらwithが必要」などという絶対に知っておかなければならない事項をマークさせる（同じ紙の辞書を持っているわけではないので統一指導は難しいが）。その際，やはり『ジーニアス』の詳しさは群を抜いている。『ジーニアス』では単に「about 不要」という説明にと

どまらず，「～ (×about, ×on) the problem」のように誤用しないための表記の工夫がしてあり，さらに discuss は後ろの前置詞の有無ばかりに注意が行って，後ろの文構造に関する語法がなおざりになっている事実にも触れ，「discuss 直後の目的語は名詞か動名詞，不定詞は不可，that 節も不可だが discuss the fact that S＋V～ の形で用いることは可」という趣旨の記載がある。ここまでくるともう圧巻の説明である。一段階上のレベルの語法説明を，詳しく，さらに生徒が目に触れやすい語義欄に，はっきりと記載している。それが『ジーニアス』の特色である。

まずは電子辞書で『ジーニアス』を使ってみて，その詳しさに圧倒され，後日紙媒体の『ジーニアス』を購入する生徒も少なくない。

●語法問題集の功罪と「プラスアルファ」を果たす英和辞典の役割

昨今は各出版社がいわゆる「英文法・語法問題集」という，見開きで左頁に問題，右頁に解説，その下に小さく解答が載っている形式の問題集を発行している。これが高校生の間でもバイブル化しており，本校にも大学受験時までにボロボロになるまで使いこなしている生徒が多い。確かに簡潔で的を射た解説が書かれているが，その一方で生徒はこの２，３行の解説を読むだけで満足してしまう。挙句の果てには単語帳や語法問題集の索引でその単語を調べ，解説を読んでよしとしてしまい，辞書を全くひかない。

私はこの種の問題集の小テストを返却する際に毎回２，３語ほど最重要の単語を黒板に書き，その単語を家で英和辞典を使って調べマーカーをひかせている。辞書の説明が語法問題集以上に詳しければ問題集の余白に必要事項を転記させている。あくまで各自の家庭学習に任せてあるので徹底されているか疑問ではあるが，プロである教師の眼で見た「この単語だけは絶対に語法を覚えて欲しい」という単語だけに絞って生徒に提示すれば効果は大きいと思う。その点第４版では，重要単語は見出し語のすぐ下に最低限の必要事項が書かれてある。基本義，大まかな意味，簡単な語法，参照番号，そしてその意味のイメージなどここを見るだけでもかなりの情報が吸収できる。大学入試攻略のカギとなるもののひとつに give，get，take，have などのごく易しい頻出単語とその意味をイメージで覚え，前置詞等と組み合わせて使いこなしていくことがある。この欄はそのためにも大いに生徒の「味方」になってくれるのではないだろうか。このことだけではなく「２色刷の導入」（第２版），「『ジーニアス英和大辞典』から専門用語の抜粋・充実」（第３版），「紙面サイズ拡大におけるゆったりとした見やすいレイアウト，周囲余白の充実，重要語の大見出し化」（第４版）など，改訂のたびに使いやすさ，内容とも確実に進化している。

●おわりに

英語を教える側からは電子辞書に関して負の面を多く耳にするが，何事にも負の部分はつきものである。電子辞書にも紙の辞書にもいい面はたくさんある。電子辞書には迅速性，ジャンプ機能，履歴機能という「紙」より勝る機能がある。一方紙の辞書は高校２年生後半以降にじっくり腰を据えて英作文等に取り組む際，何度も根気強く使いこなすことによって初めてその良さを生徒が実感するのである。知っている単語を羅列したり習ったばかりの熟語を当てはめて使う作文のレベルから，日本語をパラフレーズし，カギとなる単語の語法をじっくり辞書で読んで認識し実際に自分で書いてみるレベルに移行する段階で紙の辞書はなくてはならないものになってくるのである。その大切な語法説明がどんな辞書よりもわかりやすい，そして読んでいて生徒の知的好奇心を大いに刺激するのが『ジーニアス英和辞典』である，と私は信じている。

（なかじま　ひろき・浜松市立高等学校教諭）